

ほんの小部屋 24 号 (2003)

西山教行 (経済学部)

L. カトー、米原真理 訳、『わたしの外国語学習法』、筑摩書房、282 p、ちくま学芸文庫、950 円

春は新しいことばの季節である。とりわけ、新入生は英語以外のことばを学ぶ機会を前にして、期待とおそらく多少の不安に胸をふくらませていることだろう。英語であんなに苦労したのだから、もう外国語で苦しmitakないと思う人もいれば、だからこそ、今後はほかの外国語をもう少し楽しく身につけたいと思っている人も多いはずだ。

本書の筆者はハンガリー人の通訳者・翻訳家であるが、そのスケールたるや私たちの想像を絶する。というのも、筆者は 5 ヵ国語の同時通訳者、10 ヵ国語の逐次通訳者、16 ヵ国語の翻訳者とおよそ日本ではあり得ないような才能の持ち主だからだ。確かに、「教えながら学ぶ」ということわざを実行に移したり、新たにことばを学ぶに当たり、わざと上級のクラスに登録するなど、かなりの度胸の持ち主でもある。そんなことばの達人が、自分の手の内をあかそうというのだ。とは言っても、筆者は言語学者や理論家のように、高邁な理論で人を煙に巻こうというのではない。一人の「外国語習得者」として自らの学習過程の内部に関心を持ち、より効果的な外国語学習法を求めているに他ならない。

著者は外国語学習をたびたび、家の建築にたとえているが、家であれば、土台がしっかりしていなければたちまち崩れてしまう。ことばの学習でも、土台が大切なのは、言うまでもない。しかし、「土台こそ、最大限のエネルギーが消耗される」ことをつい忘れて、初期投資にいやになって投げ出してしまうのも真実だ。

だからこそ、土台に大きなエネルギーを傾けることはむしろ当然なのだとつぶやきながら、新しいことばの世界の扉を開いてみたいと思う。

C. オ克蘭、『語り継ぐヨーロッパ統合の夢：ローマ帝国からユーロ誕生まで』、NHK 出版、1500 円

ヨーロッパは一つになろうとしている。2002 年に統一通貨ユーロを導入し、経済統合に加えて政治統合も推進するヨーロッパ。しかし、この「ヨーロッパ」は自然発生的に生まれたものではない。19 世紀から 20 世紀の 100 年の間に三度の戦争を体験し、戦いに疲弊した独仏が恒久平和への願いをこめて、その祈りから生まれたもので、この「ヨーロッパ」は西ヨーロッパ五ヵ国に

始まり、次第にその版図を拡大し、いまや東ヨーロッパ諸国を含む巨大な「国」になろうとしている。

著者はヨーロッパ統合をギリシア神話から説きおこし、カエサルのうち立てたローマ帝国こそヨーロッパの起源であると考え。その後、シャルルマーニュやさらにナポレオンの帝国、ヒトラーの第三帝国の野望、あるいはスターリンの構想によるロシアを含む東欧社会主義帝国など、程度の差こそあれ、いずれもヨーロッパ統合の夢にとりつかれた男たちの足跡を示している。現在進みつつあるヨーロッパの東方拡大は世界史の中でヨーロッパが絶えず追求してきた夢なのだ。

このように本書は、起源から現代に至るヨーロッパの歴史を「統合」をキーワードとして説き明かすが、後半は欧州連合の構築と現状に当てられているため、歴史書にとどまらず、現代ヨーロッパを理解するための格好の手引きとなっている。

著者は、欧州連合の建設に尽力したベルギー人外交官を祖父に持ち、ブリュッセルに生まれ、フランスに活躍するジャーナリスト。本書の題名が「語り継ぐヨーロッパ統合の夢」というのも、著者自身が祖父や父よりヨーロッパの歴史を受け継いだ体験を持つためでもあり、その上で、著者は息子に語り継ごうとするからでもある。語り口調は平易で、ヨーロッパ人が家族のなかで歴史を伝承する様子が見て取れるようだ。

世界史の学習に疲れた頭を切り換えて、改めてヨーロッパの流れを考え直すために絶好の書物といえよう。